

## 心内の情報を指示するソ系（列）指示詞の用法について

堤 良 一 岡 崎 友 子

岡山大学

立命館大学

**【要旨】** 本稿では、これまで現場指示用法あるいは文脈照応用法の例外的存在として扱われてきた一連のソ系（列）指示詞の用法について、それらは両者とはまったく異なる「基準指示用法」であること、この用法は、日本語の中に古くから形を変えながら存在する用法であることを指摘した。「基準指示用法」は、何らかの対象を、心内の基準と照合する。堤（2002, 2012）を援用し、これらのソ系指示詞が変項解釈を受け、そのことによって、この用法が共通してもつ、いくつかの特徴が説明できることを示した\*。

**キーワード：** 指示詞, 基準指示用法, ソ系（列）指示詞, 歴史的变化, 変項解釈

### 1. はじめに

本稿では、次のようなソ系（列）<sup>1</sup> 指示詞の用法を考察し、これらのソ系指示詞が何を指示しているのかについて統一的な説明を試みる。

- (1) これはあなたのですか。－そうです。
- (2) 私、彼の考え方は間違っていると思う。－そうそう！ 私もそう思う。
- (3) (ピアノを弾いている生徒に先生が) そう！ そう！（合格点を出すソウ）
- (4) 授業はどうだった？ －そんなにおもしろくなかった。（否定対極表現）

これらの意味を考えると、(1) (2) では、相手の発話情報である、「これはあなたのものか」「彼の考え方は間違っている」と、話者の心内の情報、信念とを照合してソウと言っていると思われる。これは、先行文脈の情報を受け継ぐ、単なる文脈照応とは一線を画す。

(3) では、目の前の演奏が話者の心内の基準に照らし合わせて、その基準以上であることを（定延 2002a）、(4) では、話者の心内の期待に照らし合わせて、授業がその期待以下であることを表している（服部 1994）。これらの「話者の信念」や「基

\* 本稿は日本語学会 2014 年度春季大会、2020 年第 1 回土曜ことばの会で発表したものを修正・加筆したものである。その席上、多くの方から有益なコメントをいただいた。また、金水敏氏、竹内史郎氏、衣畑智秀氏、大江元貴氏、閻琳氏、榎原実香氏、さらに本誌の 2 名の査読者から大変貴重なコメントをいただいた。記して感謝申し上げる。なお、本研究は、JSPS 17K02775、19K00646、20K00636 の助成を受けている。

<sup>1</sup> 本稿では岡崎（2010）にしたがい、現代語の指示詞については「ソ系」、古代語の指示詞について論じる際には「ソ系列」という用語を用いる。また、本稿では、その状況で不自然な文であるということを示す # を付して表す。

準・期待」を、まとめて「基準」と呼ぶとすると、ソ系指示詞には基準を指示する用法があるということになる。以下、本稿ではこの用法を「基準指示用法」と呼ぶ。

(5) (6) も基準を指すと考えられる。これらは、世間一般で認められるような(岡崎 2006, 2010), それを聞けばある程度指示対象が決まってしまう用法である。

(5) あの人, そっち系/その筋の人なんだって。

(6) (町でばったり男女の友人に出会い) ははーん, 2人はそういう関係か。

上記のように、これらの用法が基準を指すという指摘は個別に行われてはいるが、なぜ基準を指すのか、あるいはこれらが相互に関連するのかといったことについては議論されていない。本稿では、このことを、堤 (2002, 2012) の理論を援用し、ソ系指示詞は可変的な解釈を受ける(変項を介して解釈される)ことから説明する。結論として、これらの用法が、ソ系指示詞が持つ意味から導き出されることを主張する。

本稿は以下のように構成される。次節で各用法の詳細な記述を行う。基準指示用法は、言語文脈内あるいは眼前の対象と心内の基準(以下、「基準」と呼ぶ)を照合する。これは、現場指示用法にも文脈照応用法にもない特徴である。3節では、ソ系指示詞が対象と心内の基準を照合するとはどういうことかについて考察する。基準は、対象に基づいてその都度作成される(演奏者のレベルが異なれば当然基準も異なる)。この基準の作成には関数に関わっており、そのことによりソ系指示詞による指示が行われると考える。4節では、これらの用法が歴史的にどのようなかを中古(平安時代)の例で見る。最終節はまとめと今後の課題である。

## 2. 基準を指すソ系(列)指示詞

### 2.1. 本稿の考察対象

まず、本稿での考察対象となる、基準指示用法について、その範囲を限定することから始めよう。これらの用法は文脈照応用法と現場指示用法とにまたがって見られ、なおかつ、基準を有するという点で両者とは性質を異にすることを示す。考察するのは、(9) (10) の、相手の発話と話者の情報を照合してソウという用法(「同意のソウ」と呼ぶ)、(11) の、眼前のパフォーマンスに対して、心内の基準と照合して合格点を出す用法(「合格点を出すソウ」, 定延 2002a), (12) の、心内の期待と照合して、ある対象がその期待以下であることを示す用法(否定対極表現)、そして(13) (14) のように、心内の「一般常識」と照合して判断を下す用法(「曖昧指示表現  $\alpha$ 」, 岡崎 2010) である。

まず、これらの用法が文脈照応用法とも現場指示用法とも異なることを示す。一般的に、指示詞の文脈照応用法は、言語文脈内に顕現する情報を指す(庵 2007 等)。同時に、指示詞が付与される名詞が何らかの卓立性を文脈内で持てばコ系指示詞に置き換えることも可能である(正保 1981, 庵 1995, 2007)。

(7) 昨日、ぜんざいを食べました。{その／この} ぜんざいはおいしかった。  
 (そのぜんざい=昨日食べたぜんざい)

(8) 小麦粉と水を混ぜて、{それ／これ} を30分ほど寝かせます。

(金水 1999: 72 に加筆)

一方、基準指示用法では、コ系指示詞の使用は認められない。これは文脈照応用法とは一線を画す特徴である（＃は当該の文脈では不自然であることを示す）。

(9) これはあなたのですか。－ {そう／＃こう} です。

(10) 私、彼の考え方は間違っていると思う。－ {そうそう／＃こうこう} ！ 私  
 も {そう／＃こう} 思う。

(11) (ピアノを弾いている生徒に先生が) {そう！ そう！／＃こう！ こう！}

(12) 授業はどうだった？－ {そんなに／＃こんなに} おもしろくなかった。

(13) あの人、{そっち系／その筋／＃こっち系／＃この筋} の人なんだって。

(14) (町でばったり男女の友人に出会い)ははーん、2人は{そういう／＃こういう}  
 関係か。

(9) (10) (11) (12) を現場指示用法と考えることもできない。つまり、相手の領域を指してソ系指示詞が用いられるとする人称区分説（佐久間 1951）では説明ができない。もし、これらのソ系指示詞が、人称区分的に相手の領域を指しているとするならば、話者の発話やパフォーマンスは話者の領域に属するので、コ系指示詞で指せることになるが、これらの用法では話者自身の発話に対しても、コ系指示詞は用いられない。

(15) 大きな広い穴が二時間ほどでできた。私は掘るのを止めた。これが私の限界だ。考えてみれば私はダブ（エ）ストーンにきて、まともな穴を掘ったのはこれが初めてじゃないか。{そう／＃こう} なのだ。私は穴掘りをあきらめるべきなのだ。ここでは私は穴を掘る人生に向いていないのだ。やっとそれに気づくことができた。

(BCCWJ 浅暮三文（著）ダブ（エ）ストーン街道 講談社 2003,  
 PB39\_00216, 下線部は筆者加筆)

(16) こんなもので埋まった部屋は息苦しくてカッコ悪し、気軽に引越しもしくいし、人間が理屈っぽくなりそうでイヤだったのだ。しかし、フト気づいたのである。減らしても減らしてもたまってしまうのは結局、好きなんじゃないか。いい加減、それを認めてもいいころではないかと。{そう／＃こう} なのだ。恥ずかしながら私は本が大好きなのである。本音は、本に囲まれて生活したいのだ…。

(BCCWJ 北尾トロ（著）銀座八丁目探偵社 メディアファクトリー 2000,  
 LBo0\_00017, 下線部は筆者加筆)

(17) (自分の演奏が今日は思い通りで、演奏しながら) {そう！ そう！／＃こう！}

こう! そうだ! こうすればよかったんだ。

以上の事実から、基準指示用法は文脈照応用法での説明や、人称区分説では捉えられないことがわかる。

曖昧指示表現  $\alpha$  については少し注意が必要である（以下の議論は査読者の指摘による）。(18) では「こういうこと」と「そういうこと」が言い換えられるように見える。しかしこのことは、これまでの議論の反例にはならない。なお、(18) - (21) については、日本語母語話者 18 人にソ系指示詞の使用可能性を○, △, ×で判断してもらい、その結果を記してある。

- (18) (自分の薬指に指輪をしている話者が、その指輪を相手に見せながら)  
「ほら見て、俺と純子、こういうこと / そういうこと になったんだ」(○ 15 人、  
× 3 人)

このような場合のコ系指示詞は金水(1999)が言う「間接直示」である。「間接直示」とは次のような指示詞の使用法を言う。

- (19) 「写真を見ながら「この人は誰ですか」と言ったり、バーのマッチ箱を取り出して「この店に行こう」と言ったり、仕出し弁当を食べながら「こども味が落ちたねえ」などという用法である。これらのケースでは、「写真→本人」「マッチ→店」「弁当→弁当屋」のような一種の語用論的関数、あるいはマッピングルールを介させることによって値にたどりつくことができる。直示された対象は、… (中略) …指示対象そのものと臨時的に同一視されているわけである」  
(金水 1999: 77)

間接直示においては、指示詞が指すものはあくまで現場に存在する対象である。薬指にある指輪を直示することによって、それが指す意味の解釈を間接的に得る。黒田 (1979: 50) は、「(直接的知識・体験的知識) というものの特徴は、知識の主体はその対象について、原則上は、無限の知識を持っている」ことであると述べているが、コ・ア系指示詞による指示 (直示) では、無限の知識から当該の状況に適した解釈が可能であるということである。

一方、(18) の「そういうこと」は間接直示ではない。なぜなら、現場指示用法においては、田窪 (2002) が指摘する、「近称制約 (condition on proximal construal)」によって、話者が手に持っているものや、話者自身が行うジェスチャーなどはソ系指示詞では指せないからである<sup>2</sup>。(20) では、ソ系指示詞が「近称制約」により不

<sup>2</sup>「近称制約」とは、「近くにあるものを遠くに捉えなおすことはかなり難し」く、「自分の手にもっているものを指すとか、自分が直接稼働できる身体部位などを同定する場合は、コ系列を使うのが原則である」(田窪 2002: 200) とする制約である。なお、査読者からはア系指示詞についても「ああいうこと」が言えるのではないかと指摘をいただいたが、コ系指示詞同様、ア系指示詞の場合も、その解釈は間接直示として行われると考えられる。したがって、ア系指示詞もソ系指示詞とは別に考えるべきである。

自然になることを確認されたい。

- (20) a. (自分の手に持った本を指して)この本／#その本は私が書きました。(×18人)  
 b. (自分の手でげんこつを作って)「今度こんなことをしたら、これ／#それだからな！」(×18人)
- (21) (自分の小指を立てて)「彼女は、君のこれ／?それかい？」(査読者が指摘した例文を改変)(○1人, △5人, ×12人)

(18)のように、基準指示用法のソ系指示詞は「近称制約」を受けないので現場指示用法ではない。翻って、これらの場合のコ系指示詞は間接直示で、現場指示用法である。つまり両者は指示の方法が異なっており、異なった方法で解釈がなされる。以上より本稿では、曖昧指示表現 $\alpha$ は、あくまでソ系指示詞が有する用法であると考えて議論を進める。

なお、(21)ではソレが使用できるとする話者が、△も含めると6人存在する。これらの話者には、ソレが曖昧指示表現 $\alpha$ として解釈できる余地があるということであろう。現代語においては、曖昧指示表現 $\alpha$ は「色恋沙汰」を表すことが多い。色恋沙汰を表すジェスチャーではない(20b)を、ソレで指せるとした話者はいないが、これは「殴る」という行動が、曖昧指示表現 $\alpha$ の指示対象として心内に存在しないからであろう。

次に、これらの用法は文脈照応用法とは異なり、(11) - (14)のように先行文脈がなくても使用できる<sup>3</sup>。上山(2000)は、文脈照応用法では、顕現した文脈が必要だと述べているが、このことから、基準指示用法が文脈照応用法と異なっていることが確認できるだろう。

- (22) (心内では「そいつ」のことを様々考えた状況で)  
 「#そいつはどこだ！」(上山2000:172)
- (23) (談話の冒頭で)あ、おはよう。昨日の#そのことなんだけどね……。

本稿では主に上記の用法で用いられるソ系指示詞を基準指示用法として認め、議論を進めていく。次節では、基準指示用法の特徴を見ていくことにしよう。

## 2.2. 基準指示用法の特徴

基準指示用法のソ系指示詞は、次のような特徴を有する。すでに(24a)は前節で議論したので、本節では以下、(24b-e)について見ていくことにする。

- (24) a. ソ系指示詞でのみ指示される。(前節の議論)  
 b. 対象と基準の二者を要する。

<sup>3</sup> 顕現する先行文脈が存在する場合には、文脈照応用法と基準指示用法の両方の解釈が可能になる。注6も参照のこと。

- c. 基準を有さない話者は用いることができない。
- d. 基準は対象に応じて可変的である。
- e. 基準指示用法は、現場性を有する。

### 2.2.1. 対象と基準の二者を要する (24b)

基準指示用法は、心内で作り出される基準と、提示される対象とを照合する。ソ系指示詞が対象を指すのはもちろんであるが、それだけでは同意したり、合格点を出したりすることができず、心内の基準を参照し、それと照合するような直感がある。

まずは「同意のソウ」を見よう。(25a)では、「この本はあなた(話者)のか」という内容に対して、心内の基準と照合し、その結果が一致することを言っている。(25b)も同じく、相手の発話内容と話者の心内の基準を照合し、それが一致していることをソウで述べている。(25c, d)でも同様に、「たばこはよくないか」「彼の考え方は極端すぎるか」について、心内の基準を作成し、それと照合させた上で同意している。

(25)が(相手が発する)言語情報を基に基準が選ばれるのに対し、(26)は眼前で行われるパフォーマンス(演奏)を基に基準が選ばれる。合格点を出すためには、眼前の演奏が、心内の基準と比較して、それ以上であることが判断できなければならない。つまり、話者はパフォーマンス(対象)と基準を同時に参照している。

このように、基準指示用法のソ系指示詞は対象を相手の発話(文脈)から得る場合と、眼前の状況を直示することにより得る場合とがある。共通しているのは、それらを心内の基準と照合させるという点である。それは否定対極表現でも同じである。(27)では対象は発言により導入され、(28)では眼前の対象を直示しているが、それらが心内の基準(期待)には達しなかったことを言っている。最後に(29)は、眼前の状況と心内の基準(常識)とを照合させることで「そういうこと?」と聞いている<sup>4</sup>。

- (25) a. この本はあなたのですか? - そうです。  
 b. 来週ってテストだったっけ? - そうです。  
 c. たばこはやっぱりよくないと思います。- そうそう! / そうですね。  
 d. 彼の考え方はちょっと極端すぎるんじゃないでしょうか。 そうそう。 / そうですね<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 基準指示用法のソ系指示詞が行うのはあくまで対象と基準との照合であって、両者が一致するか(「同意のソウ」「曖昧指示表現 a」)、基準以上であるか(「合格点を出すソウ」)、基準より下であるか(否定対極表現)は、ソが付与される形態素(「(ソ)ウ」「(ソ)ンナ」)が担うと考えられる。「ソウ」は基準と一致、基準以上の両方を表すが、これは場面や状況によって現れる二次的な効果であると考えられる(査読者の指摘による)。

<sup>5</sup> 定延(2002a: 78-83)では、「照応詞「そう」と「肯定応答の「そう」(本稿の「同意のソウ」)とを区別した上で、前者では「名詞以外の語句を指す際には自然になりにくい」(p.79)が、後者ではそのような「名詞の偏好に類するものは見られない」(p.82)と指摘している。i) が



- e. 相手の発話（対象）≡話者の心内の情報（基準）
- (26) a. (ピアノの演奏をしている生徒に先生が) そうそう!  
 b. 眼前の演奏（対象）≧話者の基準（≧：基準以上である）  
 c. (ピアノに触ったこともない人が、目の前のピアノ演奏に) ??そう!  
そうそう!!
- (27) a. 昨日、横浜の中華料理店 K に行ったよ。でも、それほど（さほど）おいしくなかった。 (岡崎 2010: 230)  
 b. K の味（対象）<話者の期待/一般的な「おいしい店」の基準（<：基準より下）
- (28) a. その靴、いいね！ 高かったんでしょ？ - そんなに高くないよ。  
 b. その靴の値段（対象）<一般的な靴の値段 or 話者の「高い靴」の基準
- (29) (あるコミュニティでは右手の親指に黒いマニキュアをしていることは婚約していることであるとの暗黙の了解がある)  
 a. (指を見て) え？ 純ちゃん、そういうこと？  
 b. マニキュアをしている（対象）、そのコミュニティの常識（基準、婚約の証）

以上、基準指示用法のソ系指示詞は、対象を心内の基準と照合させるということ

「照応詞「そう」」で、ii) が「肯定応答の「そう」」である。

- i) a. 田中は学生で、鈴木もそうだ。 (定延 2002a: 78, 下線は筆者)  
 b. ??これは赤く、あれもそうだ。  
 ii) a. X: ツバメって渡り鳥？ Y: そう。  
 b. X: その本って、もしかして表紙、青い？ Y: そう。  
 (定延 2002a: 81-82, 下線は筆者)

(25a, b) ではソウは名詞述語を受けているが、(25c, d) ではソウは文全体を受けている。この点も、「同意のソウ」が文脈照応用法とは一線を画すことを示しているものと思われる。

一方、「同意のソウ」であれば品詞に関わらずソウが用いられるかといえばそうではない。以下の議論は査読者のコメントに拠るところが大きい。例文 iii) も査読者による。

- iii) a. (林さんに) 林さんはビデオカメラを持っていますか？ - #そうです。  
 b. (林さんに写真を見せて) 林さんのビデオカメラはこれですか？ - そうです。

これらは「同意のソウ」であるが、名詞述語を好むようである。一方、定延 (2014, 2019) 等で議論されている「きもち」が強く入れば、名詞でなくとも自然になるように思われる。

- iv) a. (遺失物預かり所に電話して)  
 係員：「あなたが落とされた財布は、大きくて、黒いですか？」  
 話者：「そうです！ 中に身分証明書が入っています」  
 b. (刑事が聞き込みで)  
 刑事：「あなたは、3日前に、ここでその男に会いましたか」  
 話者：「そうです。間違いありません」

「同意のソウ」では、文脈照応のソウとは異なり、名詞への偏好はないものと考えられるが、無制限に使用できるというわけではなく、さらに考察しなければならない問題がある（他に中島 2001, 新屋 2012 があるが、この問題に対する答えは示されていない。今後の課題としたい。なお、この議論が本稿の主張に影響を与えることはない。

を見た。基準指示用法ではこれら二者が必要である。

### 2.2.2. 基準を有さない話者は用いることができない (24c), 基準は対象に応じて可变的である (24d)

次に、基準指示用法が心内の基準を参照するために、基準を持たない話者は使用できないことを示す。さらに、基準は対象に応じて可变的であることを示す。

まず、基準を有さないために、基準を参照できない話者について考えよう。基準指示用法は、話者が基準を心内に作成することができることを前提に成立する。最初に、「同意のソウ」についてである。同意するためには、聞き手の発話が話者の心内の情報と照合されなければならない。(25) (「この本はあなたのですか?」「来週テストだったっけ?」) でソウと言えるのは、心内にそのような情報(基準)を持つ話者である。次に「合格点を出すソウ」を見よう。(26) は、ピアノの演奏に対して何らの基準も持たない者は発話することができない((26c))。(27) の否定対極表現も、中華料理に全く知識がなければ使用することはできない。中華料理を食べたことがないのに、中華料理について「それほどおいしくない」という話者は、「知ったかぶり」をしていることになる。ただし、「料理一般としての味」について評価することは可能である。(30) は、ミャンマー料理を一般的な料理と比較して発話することは可能であろうが((30b)), 話者の心内にミャンマー料理の基準がない場合には、ミャンマー料理としておいしいかどうかは判断することができない。(30a) の“??”は、ミャンマー料理と比較して、当該のミャンマー料理が(ミャンマー料理として)おいしいかどうかを言う文としては不自然という意味である。

- (30) a. 先日、ミャンマー料理のお店Yに行ったよ。ミャンマー料理自体初めてだったけど、Yは、??それほどおいしくなかったな。  
 b. 先日、ミャンマー料理を初めて食べたよ。他のミャンマー料理を食べたことがないけれど、料理として評価するなら、それほどおいしくなかったな<sup>6</sup>。

<sup>6</sup> ソ系指示詞の解釈に利用できる先行文脈がある場合には、それをを用いて解釈することは妨げられない。査読者の指摘する次のような文では、否定対極表現は文脈照応用法としても基準指示用法としても解釈されうる。前者の場合は、「田中さんが言うほどにはおいしくなかった」という解釈が、文脈のみから(つまり、基準を参照することなく)得られる。後者の解釈の場合には、話者の基準と比較して、その基準以下であったと解釈される。

- i) グルメで評判の田中さんがうまいと紹介してくれた店で食事をしたんだけど、そんなに / それほどおいしくなかった。

本稿では、先行文脈が利用できない場合になぜ解釈が得られるのかに着目しているので、文脈照応用法についてこれ以上立ち入らない(庵 2007, 堤 2012 等参照)。

なお、2つの用法が競合することは指示詞の研究においてしばしば指摘されている。

- ii) 「10年前に私は1冊の本を書いた。{その / ?あの}本は人々に高く評価され、賞をとった。それがこの本だ。{この本 / #その本}は今でも多くの学生に読まれている。  
 (金水・田窪 (1990: 143), 引用は金水・田窪 (編) 1992 より, 判断は筆者)



(29) (指輪の例) も同様に、当該のコミュニティのメンバーでなければ、婚約していることを眼前の状況からは判断することができないために、「そういうこと？」という発話はそのコミュニティの外にいる話者にとっては意味をなさない。

次に、これらの用法において参照される基準が、対象によって可変的であることを確認しよう。最初に「同意のソウ」について検討する。(31) ((25) を再掲) において、「この本はあなたのか」「来週はテストか」に対しては、作成される基準は「自分の本か否か」「来週テストがあるか否か」に関する情報であって、その値は可変的でないように思われる。しかし、これらの場合にも話者は様々な情報をもとに基準を作成していると考えられる。例えば、学校の教科書のように、同じ種類の本が同じ空間内に複数存在し得、他人の本である可能性が想定されやすいようなものの場合だと、「(自分の本には) 表紙に傷がある、コーヒーをこぼしたようなあとがある…」といった情報を引き出し、そこから基準を作成することになるだろう。「同意のソウ」においては、対象と基準とを照合した結果、肯否を決定しなければならないために、基準が可変的でないように感じられるが、上記の例では、自分の本であるかどうか完全な自信を持ってソウという場合もあるだろう。「同意のソウ」では、基準の可変性は、肯否判断の曖昧さの程度として現れると考えられる。(32) ではこのことがより明確に現れる。(32a) では配偶者かどうかは公的な手続きを経た等の情報を、基準作成の情報として用いることができるので曖昧性はないが、(32b) では、状況によっては、はっきりとは判断できないこともあるだろう。この場合には基準は曖昧になり、判断に揺れが生じる。(32b) において、「どうだろう…」と逡巡することができるのは、対象と照合するための基準に揺れがあるからだと考えられる。このように考えると、「同意のソウ」においても基準は可変的であると考えられる。

- (31) a. この本はあなたのですか？ - そうです。  
 b. 来週ってテストだったっけ？ - そうです。
- (32) a. あの人は、あなたの配偶者ですか？ # どうだろう…そうです。  
 b. あの人は、あなたの恋人ですか？ どうだろう…そうです。

次に「合格点を出すソウ」である。例えばピアノ演奏に合格点を出す場合には、眼前で行われる演奏によって基準が変わる。小学生でピアノを習い始めたばかりの生徒が演奏しているときにソウ！ と合格点を出す場合には、基準は初心者のもの

---

iii) 「昨日、山田さんという人に会いました。# あの人 / その人道に迷っていたので助けあげました」  
 (久野 1973: 186)

これらの用法では、文脈照応用法と現場指示用法 (ii)、記憶指示用法と文脈照応用法 (iii) が競合している。これらの場合には金水・田窪 (1990)、田窪・金水 (1996)、金水 (1999) が言うような、語用論的制約によって一方が強く選択されるが、i) の場合には文脈照応用法が優先的に選択されるということではなく、文脈や状況、話者の意図等によって左右されるようである。この問題については今後の課題とする。

が心内で作成され参照されるだろうし、音大生の演奏である場合にはそれなりのレベルの基準が作成され、参照される。また、演奏者自身の成長を考慮して合格点を出す場合には、基準は過去のその演奏者の演奏レベルである。このように、「合格点を出すソウ」においては、基準は可変的である。

否定対極表現の場合に基準が可変的であることはすでに少し見ている。(30)のミャンマー料理の例の場合、一般的な料理としての基準を参照する場合もあれば、ミャンマー料理としてのおいしさを基準としてYの味を評価する場合もある(その場合、ミャンマー料理をある程度経験している必要がある)。(33a)は、「一般的な基準として重くない」という解釈と、「一般的には重いかもしれないが、話者独自の基準からすれば大した重量ではない」という解釈の2つが可能である。(33b)は「僕にとっては」とあり、基準が話者独自のものに限定される。このように、否定対極表現においても、参照される基準は様々に変化しうる。

- (33) a. 「その荷物重いでしょ」「いや、そんなに重くないですよ」  
 b. 「G先生の授業、おもしろいですか」「いや、僕にとってはそんなに」

最後に、曖昧指示表現 $\alpha$ を見ておこう。曖昧指示表現 $\alpha$ においては、岡崎(2010: 228)で「得られた要素に関しては、同一のコミュニティに属していれば、ほぼ同様の値を導き出せると考えられるが、完全に一致するとは限らない(下線は筆者)」という指摘があるとおりに、参照される心内の基準(常識)は、文脈や状況といった対象と、話者の受け止め方によって可変的である。(34)は、美術館で働くティムが仕事に遅刻し、それを上司のトムに告げ口されないように、同僚のアストラッドに口止めする場面である。アストラッドは女性、ティムとトムは男性であり、前後の文脈にこの場面に関係するような情報は無い。

- (34) 「すまない、アストラッド。休暇明けに、ランチごちそうするから……トムには黙っていてくれないか」

作品撤回の準備を遠巻きに眺めるアストラッドに、ティムはこっそり耳打ちした。アストラッドはじろりとティムをにらんだが、「わかった」とため息をついた。

「ただし条件があるわよ」

そらきた。まさか、高級レストラン、タヴァーン・オン・ザ・グリーンでごちそうして、なんて言うんじゃないだろうな。

「そのランチに、- トムも誘ってくれない？」

ティムは、目を瞬かせた。アストラッドは、潤んだ目でこちらをみつめている。

「そういうことか」と言うと、

「そういうことよ」と返ってきた。

(原田マハ『楽園のカンヴァス』: 82-83, 下線は筆者)

「そういうこと」は、アストラッドがトムに片思いをしていると解釈されると思

われるが、二人が既に不倫の関係にある（トムは既婚者である）と読むこともできる<sup>7</sup>。まさに曖昧指示表現 $\alpha$ は、それを意図したものなのであろう。いずれにしても、この曖昧性は「潤んだ目でこちらをみつめている」アストラッドの様子（対象）をもとに、どのような基準が作成され照合されるかということを反映していると考えられる。曖昧指示表現 $\alpha$ についても、基準の可変性が認められるのである。

以上、本節では、基準指示用法のソ系指示詞は、心内に基準を持たない話者には使用できないこと、そして、基準は可變的であることを見た。

### 2.2.3. 基準指示用法は現場性を有する (24e)

定延（2002a）は、「合格点を出すソウ」について次のように指摘している。

- (35) 「「そう」の肯定的評価は、ものに向けられたものではなく、現場での動作に向けられたものである。…（中略）…今ここでおこなわれている動作に対する肯定的評価を表す際に発せられる」（定延 2002a: 85–86, 下線は筆者）  
「絵画に関して確固とした評価基準を持っていても、美術館でその基準にかなった絵画を見て「そうそう」などと声を発することは（…中略…）ふうはない。」（ibid.: 86）

定延（2002a: 85–86）は、(35)で「合格点を出すソウ」が、現場に存在する対象であること、そしてそれが動作であるという二点について述べている。まず、「合格点を出すソウ」が動作を表すという点について見よう。定延（2002a）は、絵画を見てソウということは普通なく、それは描画動作は再現されないからであるとしている。一方、CDを聞きながらソウと言えるのは、CDの場合には現場に演奏動作が再現されるからであるという。絵の師匠が弟子の絵画の前で「そうそう、よくやった」と言うことや、絵画の技巧や、小説の生原稿の校正箇所などを見て「そうなんだよなー」とは言うことはあるが（2名の査読者からの指摘による）、本稿では定延（2002a）の議論にしたがい、これらの話者は、心内で弟子の製作動作を再現して言っていると捉えておく。

次に、これらのソウが、基本的に「現場の」対象を取り上げて、合格点を与えるという点について考えよう。本稿では「現場」を、対象が提示される場と考える。基準指示用法では、対象と基準との照合は、後述する場合を除いてその場で行われなければならない。この性質を「現場性」と言うとする、基準指示用法は現場性を有するということと言える。

「合格点を出すソウ」は定延（2002a）の説明のとおり、現場で対象の提示があり、その場で基準との照合がなされる。曖昧指示表現 $\alpha$ においても、対象は眼前に提

<sup>7</sup> 数名の日本語母語話者に確認したところ、「不倫、片思い」の他、ティムがアストラッドに好意を寄せていて、二人きりになるのが嫌なのでトムを呼んでほしいという意見も見られた。この場合、「好意を寄せている相手と、本人はその気もないのに二人きりになるべきではない」という常識が読み込まれたと考えられる。

示され基準と照合される。「同意のソウ」、否定対極表現については、対象の提示は発話によりなされるが、やはり対象と基準との照合はその場で即時的に行われる。(36)は、現場で対象の提示が行われていないように見える。この例では一見、過去の出来事(大学の生活)が提示されて、時間をおいて照合が行われているように見える。しかし、この場合も、発話時において大学の生活を思い出し、これを対象の提示として、基準との照合がその場で行われていると考えられる。

(36) 大学の生活は、それほど楽しくなかったな。

ではなぜ、基準指示用法は現場性を有するのであろうか。後述するように、基準を作り出すためには、対象を変数にとり、内心の情報をもとに基準を算出する関数に関わる。いったん対象が関数に入力されれば、計算はすぐに開始され、中断されることなく基準の算出に至る。このことが、基準指示用法に現場性をもたらす。

多くの場合、計算結果は瞬時に算出されるので、現場性を有することは理解されよう。しかし、時には計算に時間がかかることもあるだろう。その場合にも計算の中断はあってはならない。「合格点を出すソウ」の場合には、対象が動作であるために、その計算は動作が現出している間に行われなければならない。(37)のように、動作が終了し、計算が中断して他の行動(食事)が挟まった後に、突然ソウということではできない。「同意のソウ」でも(38a)のように、「これはあなたの本ですか」という発話が提示されたのに、そのことを検討しているフィラー(えーっと等、定延・田窪 1995)などを用いることなく、考える素振りも見せずに、唐突に1分後に「そうです」と返すのは不自然である。(38b)のように、明らかに質問とは無関係の発話を挿入することができないことから、このことは理解されよう。

(37) (ピアノの演奏が終了して、みんなで食事中に)「#そう!」(合格点を出すソウ)

(38) a. 「これはあなたの本ですか。」(1分後に)「#そうです」

b. 「これはあなたの本ですか。」「どうだろう…、ところでさ、今度の日曜日空いてない? #そうです」(同意のソウ)

c. 「これはあなたの本ですか」「えーっと、…どうだったかな、あ、そうです」

一方、計算の中断がなければ、計算自体が長く続くことはあり得る。(38)cでは、計算が中断されていないことがフィラーによって明示されている。この場合、計算自体は継続しているので「現場性」は保持されると考えておく。

以上、本節では、基準指示用法が現場性を有することについて説明した。対象の提示があればその場で基準との照合が行われることを現場性と考え、それがなぜであるかを考察した。この性質も、基準指示用法が対象と基準との2つを必要とし、その上で、基準は対象をもとに算出されるからであると考えた<sup>8</sup>。(24b)から(24c)

<sup>8</sup> 定延(2002a)が「気づきの「そう」」と呼ぶ用法(「そうだ! 京都行こう」など)も、現

を再掲する。

- (24) b. 対象と基準の二者を要する。  
 c. 基準を有さない話者は用いることができない。  
 d. 基準は対象に応じて可変的である。  
 e. 基準指示用法は現場性を有する。

次の疑問は、なぜ基準指示用法のソ系指示詞は対象と心内の基準を同時に参照し照合することができるのか、基準はどのように作成されるのか、なぜ基準は可変的なのか、である。次節では、文脈照応用法におけるソ系指示詞について考察した堤 (2002, 2012) の議論を援用し、ソ系指示詞が変項として解釈されると仮定することでこれらの問題について考察する。

### 3. 変項解釈とソ系指示詞—関数的解釈—

本節では、基準指示用法が、前節で観察したような特徴をなぜ有するのかについて考察する。まず堤 (2002, 2012) の議論を検討し、可変的な解釈が求められる場合には、変項を介して解釈される必要があると考える。その結果、ソ系指示詞のみが使用可能となることを見る。次に、基準指示用法がどのような処理を経て解釈されるかに関して、本稿の仮説を提案し、この仮説により前節の最後に提示した疑問がすべて説明可能であることを主張する。

#### 3.1. 堤 (2002, 2012)

文脈照応用法のソ系指示詞について、堤 (2002, 2012) は意味論的な分析を行い、コ系指示詞とソ系指示詞の言い換えの可能性について説明している。特に本稿にとって関係があるのはコ系指示詞（ア系指示詞）は使用できず、ソ系指示詞のみが使用できる場合の分析である。

- (39) a. 小麦粉と牛乳をよく混ぜ、それをフライパンに注ぐ。  
 (金水 1999: 72, (8) を再掲)  
 b. 1週間前にカレーを作った。今週またそれを作っている。
- (40) a. 太郎は羊を飼っている。花子はこの／その羊にえさをやる。  
 b. 太郎は羊を飼っていて、それを育てて売ることによって生計を立てている。花子は \*この／その羊にえさをやる。  
 (堤 2002: 67)

---

場性を有し、何かの刺激をきっかけにして心内で突然何かが閃くというようなニュアンスがあるが、これについては、どのようなきっかけが対象としてあり得るのか、照合される基準はどのようなものなのかなど、不明な点も多い。今後の課題とする。なお、査読者から定延 (2002b) 等の「探索意識」のような意識が関係するのではないかという指摘をいただいた。現段階ではこれに対する明確な回答はできない。引き続き検討していく。



- (41) a. 学生たちは一生懸命論文を書いた。しかし結局だれも \*この／その論文を教授に提出しなかった。(金水 1999: 83 を修正, 文法性判断は筆者)  
 b. どの国も, \*この／その国の旗を持って入場した。(堤 2002: 70)
- (42) a. チョムスキーと \*この／その著書／『坊っちゃん』と \*この／その著者  
 b. 実験は \*この／その結果が大切だ。(堤 2002: 70)
- (43) a. 順子は「あなたなしでは生きられない」と言っていた。\*この／その順子が今は他の男の子供を2人も産んでいる。(庵 1996b: 31)  
 b. 太郎は朝寝坊でめったに朝ごはんを食べない。今朝, \*この／その太郎が朝ご飯を食べた。(庵 1996b: 34)

堤 (2002, 2012) は、これらの用例ではソ系指示詞が意味解釈の際に変項として解釈され、その結果として指示対象が不特定であったり可変的であったりする読みが生じるという。(39) では「それ」が指すものは「小麦粉と牛乳／(1週間前に作った)カレー」ではない。(40a) では「この／その」がともに自然であるが、飼っている羊の内実を不特定にすると、(40b) のようにコノが言えなくなる<sup>9</sup>。(41) は金水 (1999) で「分配的解釈」と呼ばれているものであるが、「学生」の値が変わると、「論文」の値も連動して変わる。(42) は「代行指示」(庵 1996a) と呼ばれるもので、「xの著書 (y)」「xの著者 (y)」のように、「著書, 著者」といった名詞句は、作家名や作品名を必須に要求するような名詞である。これらの名詞では、要求される名詞 (x) の値が変われば、y の値も変わるとされる。(43) は庵 (1996b) が「予測裏切りの意味」と呼ぶものであるが、堤 (2002, 2012) では、指示対象が決まっている固有名詞 (順子, 太郎) にソノが付与される理由を個体としての順子, 太郎を指すレベルから、場面における順子, 太郎を指すレベルへの変換をする関数が関与すると分析している。堤の主張は、旧情報をマークする提題助詞「は」が1文目の固有名詞に付き、新情報をマークする「が」が2文目に付くことから確認されるだろう。2文目の「順子, 太郎」は談話に新たに導入された対象であって、1文目のそれとは同じ値を取っていないと考えられるのである。

以上のように、堤の分析は、ソ系指示詞のみが使用される場合の解釈が、変項を

<sup>9</sup> 査読者から i) のようにすると自然になるとの指摘があった。

i) 太郎は羊をたくさん飼っている。この羊 (たち) にえさをやるのが花子の仕事だ。(40a, b) と i) を5段階 (1 = 不自然, 5 = 自然) で53人の母語話者に判定してもらった。1要因3水準参加者内の分散分析を行った結果、要因の効果が見られた ( $F(2,104)=24.23$ ,  $p<.01$ )。5%水準の Bonferroni 法による多重比較を行った結果、i) ( $M=4.26$ ,  $SD=1.14$ ) は (40a) ( $M=3.50$ ,  $SD=1.33$ ) よりも得点が高く、(40a) は (40b) ( $M=2.89$ ,  $SD=1.45$ ) よりも得点が高かった。つまり、i) が最も自然と判断され、(40b) が最も不自然と判断される。

この結果には、庵 (2007, 2019) 等の「トピックとの関連性」という概念が関わっていると考えられる。i) は「この羊」がトピックとして読まれやすく、本稿で論じている名詞句の意味的な解釈とは別に、庵 (2007, 2019) が言うような、テキストレベルで働く要因が関わっていると考えられるが、本稿ではこれ以上この問題に立ち入ることはしない。今後の課題としておく。



介してなされ、そのことで指示対象が可変的であることを統一的に説明している。基準指示用法においても、ソ系指示詞のみが使用可能であり（(24a)）、なおかつその基準は可変的であった（(24d)）。次節ではこの共通点を捉えるために、堤（2002, 2012）の分析を援用してみよう。

### 3.2. 基準指示用法と変項解釈

前節で議論したように、基準指示用法は変項を介して解釈されていると考えられる。そこでまず、基準がどのようにして形成されるかを、「合格点を出すソウ」をもとに考えてみよう。次のような関数を考える（(44) (45) は衣畑智秀氏（p. c.）による）。

まず、眼前の状況、すなわち対象をとって、話者の心内に蓄積されている事例を返すような関数を想定する。これはたとえば、 $\{s_1 = \text{小学生が演奏している}, s_2 = \text{中学生が演奏している}, s_3 = \text{高校生が演奏している} \dots\}$ のような状況の集合とし、そのいずれかをとって、事例の集合を返すような関数とする。

(44)  $f(s)$

$s$  : 眼前の状況（対象）

$f$  : 眼前の状況をとって事例の集合を返す関数

$f(s)$  : 事例の集合

(45)  $f(s_1) = \{a, b, c\}$

$f(s_2) = \{c, d, e\}$

$f(s_3) = \{e, f, g\}$

...

具体的には (45) のようになる。例えば状況 ( $s_1$ ) では、眼前で小学生が演奏している。この演奏を評価するためには、心内から過去の生徒の情報の中で関連するもの（典型的には他の、過去に教えた小学生の演奏）を参照する必要がある。 $f(s)$  は、その情報を集合として返す関数である。(45) では  $f(s_1)$  は  $\{a, b, c\}$  を返している。これは例えば「小学生 a の演奏、小学生 b の演奏、小学生 c の演奏」と考えられる。同様に、眼前の演奏が中学生、高校生ならそれに応じて返される集合は変わる。また、その生徒自身の過去の演奏と比較することも  $f(s)$  を用いて行うことができる。この場合、返される情報はその生徒の過去の演奏の集合である。

さらに、 $f(s)$  の結果を変数に取り、基準を作成する関数  $g$  を想定する ((46))。これは、 $a, b, c$  の技術だけを取り出し、それをもとに基準を作り出す関数とする。この考え方によれば、基準は  $g(f(s))$  が返す値ということになる。

(46)  $g(f(s))$

(47) これはあなたの本ですか。 - {そう / #こう} です。

(48) 私、彼の考え方は間違っていると思う。 - {そうそう / #こうこう} ! 私

もそう思う。

- (49) 授業はどうだった? - {そんなに/#こんなに} おもしろくなかった。  
 (50) あの人, {そっち系/その筋/#こっち系/#この筋} の人なんだって。  
 (51) (町でばったり男女の友人に出会い)ははーん, 2人は {そういう/#こういう}  
 関係か。

その他の例についても観察しておこう。まず、「同意のソウ」である。(47)では“s”として相手の発話「これはあなたの本か」を取る。これに関与する心内の事例は、「これ」で直示される対象が話者のものであるかどうかに関する情報である。それぞれの例文番号の対象を“s(47)”のように表記すると、 $f(s(47)) = \{ \text{表紙に傷がある, コーヒーをこぼしたシミがある, …} \}$ となる。これらの情報から、 $g(f(s(47)))$ が作成される。「同意のソウ」における基準  $g$  は、「s に対して肯定することができるか否か」を判断するものとなる。 $g(f(s(47)))$  が s(47) と照合され、肯定できるなら「ソウ」、肯定できないなら「ソウではない」となる。

(48) でも計算は同じように行われる。s(48) (「彼の考え方は間違っている」) をもとに、 $f(s(48))$  は彼の考え方に関する過去の事例 {A,B,C} を返す。これらの事例の集合をもとに判断を下すための基準  $g(f(s(48)))$  が作成される。

次に、否定対極表現を考えよう。s(49) は「授業はおもしろかったか」である。この場合は「合格点を出すソウ」同様、 $f$  は過去の授業の事例を返す。 $g$  は、そこから授業のおもしろさを取り出し基準を作成する。 $g$  が返した基準を下回ることを「ソナニ」は表している。

(50) (51) はどうか。s(50) は「あの人」が持っている属性の一部である。 $f(s(50))$  は、それに関与的な心内の蓄積された事例の集合を返す。例えば、s(50) が「あの人」の粗暴な素行であったり、悪い噂だったりする場合、 $f(s(50))$  はそのような素行を見たり聞いたりして心内に蓄積された事例が返される。そこから  $g$  が、基準を作り出す。「そっち系」は、 $g$  が返した基準を指す。(51) も同じで、黒いマニキュアを親指にしていることを見て、それに関与的な過去の事例を心内から取り出し、基準を作成する。この場合、 $f(s(51))$  は一様に、「黒いマニキュアを親指にしていた人物 a, b, c, … は婚約していた」という事例を返すので、 $g(f(s(51)))$  は「黒いマニキュアを親指にしている人物は婚約している」となる。(50) (51) の場合には、あるコミュニティに属している話者はほぼ同じ基準を得る (ただし、2.2.2. の議論のように、話者によって揺れは生じうる)。岡崎 (2010) が曖昧指示表現  $\alpha$  として取り出したものは、基準指示用法のうち、このような特徴を持ったものを指して言ったものであろう。

以上、本節では堤 (2002, 2012) の説を援用すれば、基準指示用法のソ系指示詞が、同じ過程を経て得られる基準を指すと考えられることを示した。このように考えることで、先述した基準指示用法の特徴はどのように説明されるのであろうか。次節で考察することとする。

### 3.3. 基準指示用法の特徴再考

前節までで、基準指示用法の各例が、関数によって作成された値を指すことを見た。一方、我々は2.2.で、基準指示用法が持つ特徴について記述した。ここではそれらの特徴が、(46)によって、どのように説明されるか考えてみよう。(46)(24)を再掲する。

- (46)  $g(f(s))$   
 (24) a. ソ系指示詞でのみ指示される。  
 b. 対象と基準の二者を要する。  
 c. 基準を有さない話者は用いることができない。  
 d. 基準は対象に応じて可変的である。  
 e. 対象は現場性を有する。

堤(2002, 2012)にしたがうならば、ソ系指示詞でのみ指示されるのは、これまでに見てきたように、基準指示用法の解釈に変項が関わるためである。

また、 $f(s)$ は「眼前の状況をとって、話者の心内に蓄積されている事例を返すような関数」であった。話者の心内に事例が蓄積していなければ、この関数は値を返すことができないので、計算は行われず解釈は失敗する。さらに、すでに見たように、 $f(s)$ が返す事例の集合によって基準が変わる。中華料理の例では、「そんなにおいしくない」は、 $f(s)$ が返す事例の集合が「これまで食べてきた中華料理の集合」か、「様々な料理の集合」か、「同じような値段の中華料理の集合」かで作られる基準が変わる。すなわち、基準は可変的である。

このように考えると、(24a)から(24d)は、(46)により説明できる。(24e)の現場性についてはすでに2.2.3.で少し触れている。現場性が生じるのは、基準指示用法に関わる関数の計算が途中で中断されてはならないからである。眼前の状況(s)の入力から基準 $g(f(s))$ の作成までに中断があってはならないことは、(37)(38)でも見た。再掲する。(37)では眼前のピアノの演奏を対象として計算が開始される。計算は食事などによって中断されてはならない。質問とは無関係の話題を挿入すると計算は中断し、後続の「そうです」は不自然になる((38b))。

また、計算は原則として即時に行われる。計算に時間がかかる場合にはそのことをフィラー等で明示する必要がある。(38a)は計算が中断していると見なされ不自然になるが、(38c)では計算が継続していることが明示されるために自然である。

- (37) (ピアノの演奏が終了して、みんなで食事中に)「#そう!」(合格点を出すソウ)  
 (38) a. 「これはあなたの本ですか。」(1分後に)「#そうです」  
 b. 「これはあなたの本ですか。」「どうだろう…、ところでさ、今度の日曜日空いてない? #そうです」(同意のソウ)  
 c. 「これはあなたの本ですか」「えーっと、…どうだったかな、あ、そうです」

以上、本節ではまず堤（2002, 2012）を概観し、堤の変項を用いた説明を、基準指示用法に援用することを試みた。これにより、基準指示用法がうまく説明できることを見た。次節以降では、これまでの議論をもとに、基準指示用法の歴史的変遷について考察する。

#### 4. 歴史的考察

本論に入る前に、歴史的な指示詞について確認しておく。岡崎（2010）で指摘されるように現代語は指示代名詞・指示副詞ともにコ・ソ・アの3系にまとめられるが、古代語（上代・中古）では指示代名詞はコ・ソ・カ（ア）の3系列、指示副詞はカク・サ（シカ）の2系列である。本稿が現代語で扱っているソウは、上代・中古のサが中世にサウ、そして近世以降にソウと変化したものである。

古代語は内省が効かないため、上記の現代語でおこなった分析は不可能であるが、意味的に見て（解釈すると）、基準指示用法の例は古代語にまとまって見られる。そこでまず、先行研究で扱われている、基準指示用法と考えられる記述・分析についてまとめておく<sup>10</sup>。

##### 4.1. 先行研究

基準指示用法と考えられる言語事象の記述・分析が、歴史的な先行研究にも散見される。扱われている語句をまとめてみると、①「そよ（や）」「さり（や）」、②「されば（こそ・よ）」、③「さる（べき・もの）」となる。①から③について、それぞれ述べていく（「さる」は、指示副詞「さ」+動詞「あり」が「さる」となったもの）。

###### ①「そよ（や）」「さり（や）」

阿久澤（1993）は「そよ（や）」と「さり（や）」は同感するという意味を持つ点で似ているが用法の違いが見られ、「そよ（や）」は相手に自分の意志を伝えようとする傾向が強く、「さり（や）」は自分自身に納得するところに用法の中心があると指摘する。

(52) 「いとうたて、みだりごちのあしうはべれば、うつぶし臥してはべるや。  
おまへ  
御前にこそわりなくおほさるらめ」と言へば、「そよ。などかうは」とて、  
かい探りたまふに、息もせず。 （源氏物語、阿久澤1993:93）

(53) 「さりや。いづれに落つるにか」とのたまはず。

（源氏物語、阿久澤1993:90）

確かに、その傾向はみられるが、後で述べるが、これは「同意のソウ」の「そよ（や）」と、曖昧指示表現 $\alpha$ の「さり（や）」という用法の違いと捉えられる。

<sup>10</sup> 以下の歴史的考察で示した例について、先行研究から引用したものは（作品名、先行研究名：その頁数）とし、また、本稿の使用テキストの示した『新編日本古典文学全集』（小学館）から引用したものは（作品名、頁数）とした。

## ②「されば(こそ・よ)」

「されば(こそ・よ)」は、半藤(1992)、徳永(2007)、岡崎(2015)によって記述・分析されている。半藤(1992)では「されば(こそ・よ)」は「思った通りだ」「それみたことか」といった意味であり、両者は用法的・意味的にあまり差がないとする。ただし、半藤(1992)は「こそ」が何助詞にあたるのかを主に論ずるものであり、本稿が問題とするソ・サ系列指示詞の機能に関する言及はない。また、徳永(2007)に関しても、ソ・サ系列指示詞の機能ではなく、「さればこそ」は接続用法「気づかせ表現」が後部省略(54)をへて、感動用法(55)が成立したとする論となっている。

- (54) 「(省略)かく、かたじけなきなげの御言の葉は、後の御心もたどり聞えさせず、いとうれしう思ひ給へられぬべき折節に侍りながら、すこしもなずらひなるさまにも、ものし給はず、御年よりも若びてならひ給へれば、いとかたはら痛く侍る」と、きこゆ。(省略)君は、うへを恋ひ聞え給ひて泣き臥し給へるに、御遊びがたきどもの、「直衣着たる人のおはする。宮のおはしますなめり」と聞こゆれば、起き出で給ひて、「少納言よ。宮のおはするか」とて寄りおはしたる御声、いとらうたし。「宮にはあらねど、又、思し放つべうもあらず。こち」との給ふを、「恥づかしかりし人」と、さすがに聞きなして、「あしう言ひてけり」と思して、乳母にさし寄りて、「いざかし、ねぶたきに」との給へば、「今更に、など忍び給ふらむ。この膝の上に大殿籠れよ。いますこし寄り給へ」との給へば、乳母の、「さればこそ。かう世づかぬ御程にてなむ」とて、押し寄せたてまつりたれば、何心もなく給へるに、…

(源氏物語、徳永 2007: 226-227)

- (55) ある坊を見給に、八九十ばかりなる老僧の、只二人ゐて囲碁を打。仏もなく、経も見えず。ただ囲碁を打ほかは、他事なし。達磨、件坊を出て、他の僧の間に、答云、「此老僧二人、若より囲碁の外はすることなし。すべて仏法の名をだに聞かず。よって寺僧、にくみやしみて、交會する事なし。むなしく僧供を受。外道のごとく思へり」と云々。和尚これを聞きて、定て様あらんと思て、此老僧が傍にゐて、囲碁うつあり様を見れば、一人は立り、一人は居りとみるに、忽然として失ぬ。あやしく思程に、立る僧は帰るりたりとみる程に、又ゐたる僧うせぬ。見れば又出でぬ。さればこそと思て、「囲碁の外、他事なしと承るに、證果の上人にこそおはしけれ。其故を問奉らん」と宣に、…

(宇治拾遺物語、徳永 2007: 227-228)

徳永(2007)の指摘するように(54)は少納言が以前に言ったこと(波線部)に対し自身がその通りであることを表し、(55)は予想したある事柄(波線部)がその通りとなったことを表す、という意味の相違はある。しかし、接続用法とされる(54)のサは、先行詞を受けているとは判断できず、(55)のサと同用法であろう。これについて岡崎(2015)は「されば(こそ・よ)」の感動詞的な慣用句用法は接

続用法からではなく、記憶指示用法「やはりそうだ」であったものが、「案の定だ」「予想通り」等の慣用的な意味になったと指摘している。

③「さる（もの・べき）」

「さるものにて」について中村（1984: 44-45）は（56）の「さる」が前と後ろを代用するものであり、「この「さるものにて」は、その順行代用と逆行代用とを併せ行う指示語であったといえようか」とする（ただし、例によっては改変を加えている）。

- （56） わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし  
 （源氏物語、桐壺：39）  
 （現代語訳：表向きの学問は申すにおよばず、琴、笛の音にも宮中の人々を驚かせ）

順行・逆行代用を併せ行うということは、サ系列指示詞の機能としては考えにくく、これは「さるものにて」の構文的な特徴によって現れた意味解釈によるものと考えられる。ただし、中村（1984: 47）の「まず前題を提示して、それがどうであるのか、それをどうするのか、それに対してどう感ずるのか等々を深層に描いて、それを「さるものにて」によって承けて現したもので、それが、「さるものにて」の前後に構築される構文の生成過程かと思えてくるのである」という指摘、さらに「さるべき・～をばさるものにて」を扱った中村・碁石（2000）においても、「さり」の指示機能を「深層指示」とし「時間的・空間的な指示ではなく、話し手の心理の深層に描いた事柄を直接指示する性質のもの」（158）、「話し手と聞き手・読み手との共通理解に基づく指示」（155）という指摘を行っており、これらは本稿の基準指示用法の考えと方向性を同じくするものであろう。

- （57） からは、気うとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつつ見れば  
 （徒然草：106）  
 （現代語訳：遺骸は、人気のない山の中に埋葬して、墓参すべき日だけに、お参りしては見ていると）

最後に、本稿の基準指示用法と考えるものを、まとめて扱ったものとして岡崎（2010）がある。岡崎（2010）では、以下のソ・サ系列の用法を、感動詞（58）、曖昧指示表現 $\alpha$ （59）／ $\beta$ （60）、否定対極表現（61）としている（「同意のソウ」は感動詞に含まれる）。

- （58） 簾のもと近く寄りても、え見奉らねば、仏、「さは、この度は帰りて、後に迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞こえて  
 （更級日記、岡崎 2010: 232）  
 （59） わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし  
 （源氏物語、岡崎 2010: 232）（（56）と同例）



- (60) 草子をひろげさせ給ひて、「その月、なにのをり、その人のよみたる歌はいかに」と問ひ聞えさせ給ふを (枕草子, 岡崎 2010: 233)
- (61) わがかくすずろに心弱きにつけても、もし心を得たらむに、さ言ふばかり、ものあはれも知らぬ人にもあらず (源氏物語, 岡崎 2010: 233)

岡崎(2010)では現代語の同用法も分析しており、現代語では照応用法と同じく、感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現は心的領域の談話情報領域内の要素を対象とする指示であり、また、曖昧指示表現は現代語では衰退しているとしている。

しかし、本稿の現代語の分析で指摘したように、現代語においても曖昧指示表現は衰退しているとは考えにくく、また岡崎(2010)では、なぜソ系(列)指示詞において、それらの用法が可能であるか、といった根本的な分析には至っていない。

以上のように、先行研究ではソ・サ系列指示詞の基準指示用法と考えられる用法がそれぞれ記述・考察されているが、ソ系(列)・サ系列指示詞の機能として、統一的な説明には及んでいない。そこで本稿では、現代語で行った分析に基づき、これらの用法が現代語と同じく、言語文脈内あるいは眼前の対象と心内の基準を照合する基準指示用法であることを、中古(平安時代)の例によって説明し、そのことにより歴史的にソ系(列)・サ系列指示詞に存在する用法であったことを示していく。

#### 4.2. 同意のソウ、曖昧指示表現 $\alpha$

(62) は話者(翁)が「それ(波線部)」で指示するかぐや姫の発話(二重傍線部)と、話者(翁)の心内の情報(本物の火鼠の皮衣は焼いても焼けない等)を照合した内容が一致していることをサで述べている。これは、現代語の分析で指摘したように、相手の発する言語情報を基に基準が選ばれ、対象「相手(かぐや姫)の発話内容」と基準「話者(翁)の心内の情報」を照合し同意している((24a)対象と基準の二者を要する)。また、話者(翁)は火鼠の皮衣の様々な情報を、難題が課された時には得ていたと予想され、基準を作成している((24c)基準を有さない話者は用いることができない)。この基準は、火鼠の皮衣にのみ適応され、他の難題である仏の御石や子安貝等には適応しない((24d)基準は対象に応じて可変的である)。

- (62) かぐや姫、翁にいはく、「この皮衣は、火に焼かむに、焼けずはこそ、まことならめと思ひて、人のいふことにも負けぬ。『世になき物なれば、それをまことと疑ひなく思はむ』とのたまふ。なほ、これを焼きて試みむ」といふ。翁、「それ、さもいはれたり」といひて、大臣に、「かくなむ申す」といふ。

(竹取物語: 41)

(現代語訳:かぐや姫が、翁に言うことに、「この皮衣を、火にくべて焼いても、焼けなければ、そのときこそ、『本物の火鼠の皮衣だろう』と思って、あの方のお言葉にも従いましょう。あなたは『この世にまたとない物で、くらべようがないから、それを疑うことなく本物だと思おう』とおっしゃる。でも、やはり、これを焼いて、本物かどうか確かめてみたいと私は思うのです」と

言う。翁は、「それも、もっともな言い分だ」と言って、大臣に、「姫がかように申しています」と言う)

このような表現は現代語でも見られる。

- (63) 「日本に行ったとき、日本の社長の家にも行ったけれど、小さな家だったなあ。」と言われてしまった。それはそうだろう。いくら大会社でも、サラリーマン社長では、とても広大な豪邸に住むというわけにはゆかない。

(BCCWJ, LBj3\_00101, イギリスは豊かなり, 下線は筆者)

その他, (64) のような話し手の意見に同意した「しかしか」(「しか」は同じサ系列指示詞) 等も見出せる。

- (64) 「いで、さうごうしきに、いざたまへ。昔物語して、このおはさふ人々に、「さは、いにしへは、世はかくこそはべりけれ」と、聞かせたてまつらむ」と言ふれば、いま一人、「しかしか、いと興あることなり。いで覚えたまへ」

(大鏡:19-20)

(現代語訳:「いやどうも、退屈だから、さあいかがです、ひとつ、昔のこともどもを話して、ここにおられる方々に、「それでは、昔の世の中はいかにもこんなふうであったのでした」と、よくわかるようにお聞かせ申しましょう」と世次が言うと、もう一人の老人は、「さようさよう、それは至極おもしろいことです。さあ、昔を思い出してお話しなさいませ」)

次に、曖昧指示表現  $\alpha$  について、(65a, b) は同様に「さるべき隈」であるが, a は岡崎 (2010: 228) で指摘される「光源氏がお相手」= {身分の高い A の君か, 教養のある B の君, または美人で誉れ高い C の君あたりで (あろう所), …}, b では「盗人が隠れる場所」= {軒下, 庭の木の陰, 塀の裏, …} の集合をもとに得られた基準を示すと考えられる。このように同じ「さるべき隈」であるが, 集合によって作られる基準が変わる。なお, 対象は (65a) では相手の発言, (65b) では前文脈により導入されている。

- (65) a. 「いといたうまめだちて、まだきにやむごとなきよすが定まりたまへるこそ、さうごうしかめれ」, 「されど、さるべき隈にはよくこそ隠れ歩きたまふなれ」など言ふにも

(源氏物語, 帚木: 94)

(現代語訳:「いたってまじめにしていらっしゃって、まだお若いのにご身分の高い北の方がお決まりでいらっしゃるなんて、つまりませんわね」, 「だけど、適当な忍び所には、うまく人目に隠れてお通いのですよ」などと言っているにつけても)

- b. はづかしきもの 男の心のうち。いさとき夜居の僧。みそか盗人の、さるべき隈にゐて、見るらむを、誰かは知らむ。

(枕草子:229)

(現代語訳:「気おくれを感じるもの。男の心のうち。目ざとい夜居の僧。こ

そどろが、しかるべき物陰に身を潜めて隠れていて見ているかもしれないのを、だれが知ろうか)

なお、4.1. で述べたように中古では、「そよ(や)」(52)(66)は「同意のソウ」, 「さり(や)」(53)(67)(及び「さる(べき・もの)」(56)(57)(65)と「されば(こそ・よ)」(54)(55))は曖昧指示表現 $\alpha$ にその用法が偏ると予想される。ただし、(68)の「さりや」は同意と解釈できることから、あくまで偏りである。

- (66) 「黄金求むる絵師もこそなど、うしろめたくぞはべるや」とのたまへば、「そよ。その工匠も絵師も、いかでか心にはかなふべきわざならん。」

(源氏物語, 宿木:449)

(現代語訳:「黄金ほしさに手加減するような絵師でもあったら、などと心配でございますね」とおっしゃるので、「そのことなのです。その工匠にしる絵師にしる、どうして私の満足できるようなものが造れましょうか。」)

- (67) 寄りるたまへる柱のもとの簾の下より、やをらおよびて御袖をとらへつ。女、さりや, あな心憂と思ふに

(源氏物語, 宿木:427)

(現代語訳:「寄りかかっていたらしゃった柱のそばの御簾の下から、そっと身をのばして女君のお袖をとらえた。女君は、「やっぱりこういうことだったか、ああいやな」と思うと) )

- (68) 「なほ年経ぬるどちこそ、心かはして睦びよかりけれ」とのたまへば、人々忍びて笑ふ。「さりや, 誰かその使ひならいたまはむをばむつからん、うるさき戯れ言ひひかかりたまふを、わづらはしきに」など言ひあへり。

(源氏物語, 玉鬘:119-120)

(現代語訳:「やはり年寄同士は気が合って仲よくしやすいものだね」とおっしゃるので、女房たちは声をひそめて笑っている。「さようですとも、誰かそのようにいつもお使いくださるのをいやがるものですか。厄介なご冗談でおからかいになるので、困ってしまいます」などと言いつけている。)

#### 4.3. 否定対極表現

(69)は『源氏物語』で叔母である大弐の北の方が、末摘花のところに訪問する場面である。ここでは、作者の心内にある他者との親密さの基準と、日頃の大弐の北の方と末摘花の親密さとを照合し、その基準には達しないことを示している。これは対象(大弐の北の方と末摘花の親密さ)と基準(作者の思う他人に対する親密さ)の二者を備え、また、基準は相手との関係性(例:恋人, 親族, 単なる知り合い)によって可変的である。なお、当該の基準は物語の運び(大弐の北の方の来訪)から、作者により選り設定されたものである。

次に、(70)は女三宮の乳母が兄である左中弁に、女三宮の源氏への降嫁を仲介してほしいと打診する場面である。話者(左中弁)は、様々な情報(噂)から、女君たち(例:紫の上, 明石の君, 花散里, 末摘花, 空蝉…)に対する源氏の思いの

深さ（御心とまりたる）の基準が既にあり、相手（乳母）の発する言語情報を基にその基準が選ばれ、対象（花散里、末摘花等への思い）と基準（思いが深い：紫の上・明石の君等）とを照合した結果、対象の値が基準より下であることを示している。

- (69) げに限りなめりとやうやう思ひなりたまふに、大弐の北の方にはかに来たり。  
例はさしも睦びぬを、誘ひたてむの心にて（源氏物語、蓬生：337-338）  
（現代語訳：いかにも、もうこれきりのご縁なのだろうと、しだいにおあきらめになっているところへ、にわかには大弐の北の方がやってきたのである。平素はそれほど親しくもしていないのに、誘い出そうとの下心から）
- (70) 「院は、あやしきまで御心ながく、仮にても見そめたまへる人は、御心とまりたるをも、またさしも深からざりけるをも、方々につけて尋ねとりたまひつつ（源氏物語、若菜上：30）  
（現代語訳：あちらの院は、不思議なくらいいつまでもお気持ちが変わらないお方で、かりそめにもいったんお逢いになった女については、お気に召した方をも、またそれほど深いおぼしめしではなかった方をも、それぞれにお引き取りになっては、大勢お邸にお集め申しあげていらっしやいます）

以上のように(24)で示した現代語の基準指示用法の特徴を示すと考えられるソ・サ系列指示詞の例が中古でまとまって見いだせる。このことから、基準指示用法は慣用的・例外的な用法ではなく、歴史を通じてソ・サ系列指示詞の基本的な機能であったと予想される。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、用法の記述はなされていたものの、それらが指示詞の全体像の中でどのように位置づけられるのかが、必ずしも明らかではなかったいくつかの用法について考察した。

それらは基準指示用法であり、文脈照応用法とも現場指示用法とも異なる特徴を示すことを明らかにした。基準指示用法は、ソ系（列）指示詞のみで指され、対象と心内の基準を同時に参照し、照合する。基準は対象に応じて可変的である。

基準指示用法がこれらの特徴を共有するのは、意味解釈に変項が関わるからであると考えた。そして、歴史的な考察を通じて、これらの用法が日本語の指示詞の用法の中に、古くから存在していることも明らかにした。

本稿の考察により、例外的であると言われ、あまり言及されてこなかったような用法を、指示詞研究の枠組みの中で捉えることに成功したのではないかと思う。さらに、ソ系（列）指示詞の基準指示用法は、むしろ例外的なものではなく、ソ系（列）指示詞の基本的な機能の現れとしてみるべきであり、この基準指示用法の分析により、未だ結論に至っていない、ソ系（列）指示詞の直示用法と文脈照応用法の関連性、また、複雑なソ系（列）指示詞の指示領域（人称区分、距離区分等）の究明の糸口となる可能性もあると考える。

今後の課題としては、「そうだ! 京都行こう/忘れてた」などの、思いつき、思い出しを表す用法と、基準指示用法との関係がある(定延 2002a の「気づきの「そう」」, 注 8 も参照)。これらの用法には、i) 現場性を有し、なんらかの刺激を契機にして心内にそれまでなかったアイデアが出来る(思いつき)、心内に既存であったがそれまで忘れられていた情報を参照する(思い出し)というような直感がある。ii) コ系指示詞(ア系指示詞)はこの用法を持たないといった基準指示用法との共通点がある。今後検討されるべきである。

さらに、このような用法が他の言語でどのように表されるか、「それな!」などの新しい用法の記述が挙げられる。すべて今後の課題である。

## 参考文献

- 阿久澤忠(1993)「第一部 第四章 源氏物語を中心とした感動詞「そよや」と「さりや」」『源氏物語の語法と表現』89-111. 東京:国研出版.
- 半藤英明(1992)「古典に於ける慣用句的「こそ」の働き」『國學院雑誌』93(11): 22-29.
- 服部匡(1994)「アマリ~ナイとサhod(ソレhod)~ナイ」『日本語日本文学』61: 1-21. 同志社女子大学日本語日文学会.
- 庵功雄(1995)「テキストの意味の付与について:文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に」『日本文学』14: 79-92. 大阪大学文学部日文学研究室.
- 庵功雄(1996a)「指示と代用:文脈指示における指示表現の機能の違い」『現代日本語研究』3: 73-91. 大阪大学文学部現代日本語学講座.
- 庵功雄(1996b)「「それが」とテキストの構造:接続詞と指示詞の関係に関する一考察」『阪大日本語研究』8: 29-44. 大阪大学文学部日本語学講座.
- 庵功雄(2007)『日本語におけるテキストの結束性の研究』東京:くろしお出版.
- 庵功雄(2019)『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』東京:ひつじ書房.
- 金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6(4): 67-91.
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3. (金水敏・田窪行則(編)(1992)『指示詞』ひつじ書房所収, 123-149.).
- 久野璋(1973)『日本法研究』東京:大修館書店.
- 黒田成幸(1979)「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集 英語と日本語と』41-60. 東京:くろしお出版.
- 中島悦子(2001)「自然談話における応答詞「そう」—その機能および条件・制約—」『ことば』22: 91-102.
- 中村幸弘(1984)「連語『さるものにて』について」『國學院雑誌』85(4): 31-51.
- 中村幸弘・碓石雅利(2000)「「さるべき」の指示内容はどこにあるか?」「「~をばさるものにて」はどう解釈するか?」『古典語の構文』152-157, 158-162. 東京:おうふう.
- 岡崎友子(2006)「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について—ソ系(ソ・サ系列)指示詞再考—」『日本語の研究』2(2) (『国語学』通巻 225 号): 77-91.
- 岡崎友子(2010)『日本語指示詞の歴史的研究』東京:ひつじ書房.
- 岡崎友子(2015)「カカレバ・サレバ」の歴史的用法と変化について」『文学論叢』89: 1-21. 東洋大学文学部紀要日本文学文化篇.
- 定延利之(2002a)「「うん」と「そう」に意味はあるか」定延利之(編)「「うん」と「そう」の言語学」75-112. 東京:ひつじ書房.
- 定延利之(2002b)「「インタラクションの文法」に向けて:現代日本語の疑似エビデンシャル」『京都大学言語学研究』21: 147-185. 京都大学大学院文学研究科言語学研究室.
- 定延利之(2014)「話し言葉が好む複雑な構造 きもち欠乏症を中心に」石黒圭・橋本行洋(編)『話し言葉と書き言葉の接点』13-36. 東京:ひつじ書房.
- 定延利之(2019)『文節の文法』東京:大修館書店.

- 定延利之・田窪行則 (1995)「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」—」『言語研究』108: 74-93.
- 佐久間鼎 (1951)『現代日本語の表現と語法 (改訂版)』東京: 厚生閣 [補正版としてくろしお出版より復刊 (1983)].
- 新屋映子 (2012)「応答表現「そうです」の意味と用法」『言語教育研究』3: 75-83. 桜美林大学大学院言語教育研究科.
- 正保勇 (1981)「「コア」の体系」『日本語の指示詞』日本語教育指導参考書 8: 51-122. 東京: 国立国語研究所.
- 田窪行則 (2002)「談話における名詞の使用」仁田義雄・益岡隆志 (編)『日本語の文法 4 複文と談話』193-216. 東京: 岩波書店.
- 田窪行則・金水敏 (1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3): 59-73.
- 徳永辰通 (2007)「さればこそ」の二種類の用法—主体の感動を表出する用法の成立—」『ことばの論文集—安達隆一先生古稀記念論文集』220-232. 東京: おうふう.
- 堤良一 (2002)「文脈指示における指示詞の使い分けについて」『言語研究』122: 45-78.
- 堤良一 (2012)『現代日本語指示詞の総合的研究』東京: ココ出版.
- 上山あゆみ (2000)「日本語から見える文法の姿」『日本語学』19(4): 169-183.

## 使用テキスト

原田マハ『楽園のカンヴァス』新潮文庫、『新編日本古典文学全集 12 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』『新編日本古典文学全集 20・21・22・23・24 源氏物語』『新編日本古典文学全集 18 枕草子』『新編日本古典文学全集 34 大鏡』『新編日本古典文学全集 44 徒然草』(すべて小学館。下線を付し、現代語訳も引用した)。

## 【付記】

コーパスは次を使用した。国立国語研究所 (2019)『日本語歴史コーパス (CHJ)』(バージョン 2019.11, 中納言バージョン 2.5.0), 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』(データバージョン 1.1) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2020年1月20日確認) 資料については、『日本語歴史コーパス』を参照。

執筆者連絡先:

[受領日 2020年7月12日

堤 良一

最終原稿受理日 2021年5月24日]

岡山大学学術研究院社会文化科学学域

e-mail: tsunko [at] okayama-u.ac.jp

岡崎 友子

立命館大学文学部日本文学研究学域

e-mail: tokazaki[at]fc.ritsumeai.ac.jp



**Abstract****On the Use of *so-* series Demonstratives to Refer to Information in Mind**

RYOICHI TSUTSUMI  
*Okayama University*

TOMOKO OKAZAKI  
*Ritsumeikan University*

This paper argues that it is possible to use the Japanese *so-* series demonstratives in a way that differs from the generally accepted deictic and anaphoric uses. We refer to this as the “*criterion-referring*” use. Although this usage has previously been treated as an exception in the literature, this paper shows that it has existed in Japanese since antiquity. The “*criterion-referring*” use allows a speaker to evaluate an object or action by comparing it to an unstated criterion (information in mind). We refer to Tsutsumi’s (2002, 2012) work to show that *so-* demonstratives can be interpreted as variables and to explain some common features of the “*criterion-referring*” use.